阿波の清左衛門と京の古金屋伝兵衛

新潟県

むかし、阿波の国に清左衛門という人がいました。清左衛門の家は、もとは大金持ちでしたが、だんだん商売がうまくいかなくなって、今ではすっかり貧乏になってしまいました。

あるとき、父親が病気になって、清左衛門を枕元に呼んでいいました。

「わしは、もう長くはない。わしが死んだら、この家屋敷は手放しても、お仏壇だけは手放してはならんぞ」

それから二、三日すると、父親はなくなりました。清左衛門が、葬式をすませ、家の借金を返してしまうと、家屋敷も残りませんでした。貧乏長屋に引っ越しましたが、お仏壇をすえる場所がありません。そこで、清左衛門は、

「親父に手放すなといわれたけれども」と思いながら、しかたなく、お仏壇を売ることにしました。

清左衛門は、お仏壇をかついで、

「お仏壇や、お仏壇」と呼んで、町や村を歩いて行きました。けれども、

「いくらするんだ」と聞く人はあっても、

「三百両です」と答えると、あまりに高いもので、買ってくれる人はいませんでした。そこで、京の町へ行って、また、

「お仏壇や、お仏壇」と呼んで歩きました。

古金屋伝兵衛の家の前を通ると、伝兵衛が出てきて、

「いくらするんだ」とたずねました。

「三百両です。親父が家屋敷は手放してもこの仏壇だけは手放すなと言い残してなくなったのですが、借金だけが残りました。それで、こうやって売って歩いています」と、清左衛門は答えました。伝兵衛は、お仏壇をぐるっとまわって見て、

「これなら、手入れをして売ったら、そんはすまい」と思って、三百両で買いました。

つぎの日、伝兵衛は、お仏壇の手入れをしようと思って、屋根をはがそうとしました。すると、屋根に大判が三百両、はってありました。伝兵衛はあきれて、

「これは、かわいそうだ。昨日の男は、知らないで売ったにちがいない。明日は持って行ってやろう」と思いました。そして、つぎの日、お仏壇を風呂敷に包んで、阿波の国の清左衛

門を訪ねて行きました。
清左衛門が、破れ障子から見ていると、伝兵衛が風呂敷を背負ってやってきました。
「お仏壇を返しに来たんだろうか」と心配していると、伝兵衛がいいました。
「昨日お仏壇の手入れをしようとしたら、屋根に三百両の大判がはってありました。あなたは、それを知らずに、親が売るなといったお仏壇を売りました。わたしも、知らずに買いました。それが分かった今は、このお仏壇はお返しします」
清左衛門は、
「いやいや、それは買った人の運ですから、引き取ることはできません」とことわりました。
「いやいや、あなたが気の毒でならん。どうあっても引き取ってください」
ふたりは、引き取れ、引き取らないと言いあっていましたが、とうとう、清左衛門が、お仏壇をまた風呂敷に包んで伝兵衛に背負わせ、戸口から突き出しました。
伝兵衛は、しかたなしに外へ出ましたが、すぐにもどってきて、戸を開けて、風呂敷ごとお仏壇を置くと、そのまますぽーんと走っていこうとしました。すると、清左衛門が、いいました。
「ちょっと待ってください。そうまでするなら、お仏壇は受け取りましょう。けれども、そのかわり、わが家に昔から伝わっている魚鉢を一対、土産に持っていってください」
「それならいただきましょう」
伝兵衛は、魚鉢をもらって、京へ帰っていきました。その魚鉢は、ただの白い鉢で、鉢の裏にコイが泳いでいる絵が描いてありました。
この話が、阿波の国のお殿さまの耳に聞こえました。お殿さまは、感心して、その証の魚鉢を見たいと思いました。そこで、ふたりをお城に呼び出しました。
「阿波の国の清左衛門、来たか」
「はい」
「京の古金屋伝兵衛、来たか」
「はい」
「阿波の国の清左衛門、おまえは、父が売ってはならないといったお仏壇を売ったのか」
「はい」
「京の古金屋伝兵衛、おまえは清左衛門からそのお仏壇を買ったのか」

「はい」

というあんばいに話が進みました。お殿さまは、

「ここへ魚鉢を持ってきて見せよ」といいました。そこで、一対の白鉢が、お殿さまの前に持ってこられました。

「それに川の水をくんできて、いっぱいにはってみよ」

家来が水をくんできてそれぞれの鉢に入れると、鉢の裏に描かれていたはずのコイが、鉢の水の中を、ぱしゃぱしゃ、ぱしゃぱしゃと、泳ぎ回りました。

お殿さまはいいました。

「どうじゃ、この魚鉢、わしにくれぬか。かわりに、阿波の清左衛門は三百石（こく）、京の古金屋伝兵衛は二百石をあたえて、家来として取り立てよう。また、お仏壇から出てきた三百両は、正直者の伝兵衛にやれ」

こうして、清左衛門と伝兵衛は、どちらもけっこうに暮（く）らしたということです。

おしまい

村上郁再話

資料『新潟県佐渡昔話集』鈴木棠三／三省堂